

大学の英語オンライン授業と対面授業における学生の意識および学習面への効果について

The Opinions of Students and Effect on Learning in University English Classes in both Online and Face-to-Face Settings

松田 佳奈

Kana MATSUDA

(和歌山大学経済学部非常勤講師)

Abstract

The purpose of this study is to review the results of the awareness survey, regarding online English classes and traditional face-to-face classes conducted in the first semester of the 2021 academic year at Wakayama University. The paper also shows the comparison of the results of the term-end exams of 2021 and 2019, which was conducted face-to-face. The survey revealed that more than half of the students wanted to have a combination of online and face-to-face classes, whereas about thirty percent of students wanted all face-to-face lessons. The comparison of exams shows the combined classes in 2021 had higher scores than the face-to-face classes in 2019. Advantages and disadvantages of online classes as well as face-to-face classes are also presented. Some suggestions for more efficient English education in general are added for the future development of English teaching systems at universities.

キーワード/ Keywords: オンライン授業、翻訳教育、学習意欲、自立学習 / Online teaching、 Moodle、 TILT、 Learning motivation、 Autonomous Learning

1. はじめに

本研究の目的は、新型コロナウイルスの影響により 2020 年度から導入された和歌山大学でのオンライン英語授業の実践を振り返り、コロナ禍以前の対面授業との比較を通して、両者の効果と課題を検討することである。これにより、今後ますます増え

ることが予想される新しい授業形態への手がかりを提示したい。

2020年度は筆者が非常勤講師を務める大学の英語科目はすべてがオンライン授業に移行し、筆者は Moodle システムを使ったオンライン授業を行ってきた。多くの大学教育現場や他の教員と同様に、筆者自身も最初は戸惑ったものの、回数を重ねるにつれて筆者が使用する教材と方法はオンライン授業と相性がよいことが判明した（松田 2020）。

2021年度の前期には、最初の2回は対面授業が実施されたが、その後の緊急事態宣言発令に伴い、3回目から11回目の授業までオンラインに移行した。そして12回目から再び対面授業に戻り、16回目の単位認定試験は通常通り対面で実施されたという状況であった。

そこで、この貴重なハイブリッド型（オンライン型と従来の対面型の混合）授業の機会を今後の授業改善に活かすべく、2021年度の前期授業後に学生の意識調査を行った。さらに2021年度の試験結果と、コロナ禍以前である2019年度の通常授業後に実施した同レベルの試験結果を比較し、両者の授業形態が持つメリットおよびデメリットを考察する。

2. 授業の実践状況

2.1 対象クラス

和歌山大学経済学部1年生の2クラス（計58名）を対象に、英語必修科目において2021年4月から8月までの半期授業（週1回、90分）で実践した。筆者が担当したクラスは成績中上位のクラスである。TOEICの平均スコアは500程度、英検は準2級～2級を取得した学生が大半を占める。

2.2 2021年度前期の授業準備

前年度（2020年度）は、前期・後期ともに Moodle システムを使用したオンデマンド型のオンライン授業を実施した。2021年度4月の前期開講前においても、大学の学務課教育推進係からオンライン授業になる可能性がある旨の連絡があった。そのため、通常の対面授業およびオンライン授業の両方に使える資料を準備した。

初回はオリエンテーションを兼ねた授業説明になるため、前年度に Moodle にアップした Word 資料と PowerPoint を修正し、PowerPoint の音声を再度録音し直した。

使用教材は『On Board for More World Adventures 「続・DVDで学ぶ世界の文化と英語」』（金星堂）であり、各国の歴史や文化を紹介するDVDと教科書の練習問題で英語を学ぶ内容となっている。対象レベルはTOEICスコア400-500前後で、筆者が担当するクラスのレベルに合致しているか、少し易しめを感じる学生も中にはいる。そのため、対面授業でもオンライン授業でも、単に教材の問題を解くだけではなく

Reading パートのテキストから一部抽出した文章の翻訳をさせるなどして、難易度を調整してきた。

またオンライン授業が始まった 2020 年度は学生の多くが DVD 機器を所有していないことが判明し、DVD を使用した Listening 課題もあることから、出版社の許可を得て筆者が Moodle にアップロードするために動画編集をしてきた。しかし 2021 年度から同テキストはテキスト購入者がインターネット経由で動画を視聴できる仕様に変更され、出版社の方々の迅速な対応に感謝した次第である。このため、動画編集に時間を取られることがなくなり授業準備の効率性が高まった。

こうした教科書の仕様変更に加えて、前年度に年間を通してオンライン授業の経験があったため、2021 年度は準備にかかる労力や時間は最小限に抑えられた。さらに教える側の筆者の心構えとしても「対面とオンラインのどちらになっても十分対応できる」という自信があり、これも前年度の経験のおかげであった。混乱の中で乗り越えたトラブルを通して身に付いた自信であり、大変な状況であっても振り返ると無駄なことはなかった、とあらためて感じる。

2.3 授業の実践方法（対面）

ここで比較のため、通常の対面授業の方法を示す。

筆者の授業は基本的にアクティブ・ラーニングの一種である協働学習の形式で進めており、2 回目の授業でグループ分け（4 人または 6 人）をしている。協働学習とは「少人数グループでの学び合い（collaborative / cooperative learning）」（江利川 (2012:3)）を活用した学習方法であり、アクティブ・ラーニングの中に協働学習的な視点が組み込まれると考えられる。アクティブ・ラーニングにはグループ・ワーク、ディスカッション、ディベートなどの活動が含まれるが、本実践においては単なるグループ活動にとどまらず、アクティブ・ラーニングの手法を使って自律した学習者（Autonomous Learner）を育てることを目的とした。

そこで、授業内では一人で作業する時間も確保しつつ、その後に必ずペアワークやグループディスカッションの時間を取っている。特に「活発な相互交流の中で情報を共有するとともに、助け合い、支え合い、励まし合い、お互いの学びへの貢献を讃え合う」（ジョンソン他 (2010:15)）ことが容易に進むよう、筆者はファシリテーター（facilitator）としての役割を常に意識してきた。

前述した使用教材は、各国の歴史や文化を紹介する DVD と教科書の練習問題で英語を学ぶと同時に、英語圏に限らず他言語の文化にも関心を持たせる内容になっている。各 Chapter は Reading パートと Listening パートに分かれているため、シラバスでは基本的に各 Chapter を 2 回の授業で終了予定とした。

2021 年度前期は初回および 2 回目の授業まで対面で実施され、オリエンテーション

からグループ分け、そして Chapter1 の Listening パートの途中までが完了していた。前年度の完全オンライン授業と比べると、2 回だけでも学生と直接対話できたことやグループ分けを実施して学生間の交流ができたことで、授業や講師に対する学生の緊張感が多少やわらいだと感じている。その際にも「緊急事態宣言が発令された場合はオンライン授業になる可能性が高いが、準備はできているので安心してほしい」と学生の顔を見て直接伝えられたことも大きい。教える側の筆者と学生の双方が対面授業への心構えを再確認できたことは、その後のオンライン授業のスムーズな実施に結び付いた。

2.3.1 Reading パートについて

対面授業では、各チャプターの最初のページにある Warm-up Exercise 以外のタスクは、ポモドーロ・テクニックを使用して 25 分の集中作業時間および 5 分の休憩スタイルで学生に作業するよう指示してきた。ポモドーロ・テクニックとはあらゆるタスクに応用できる時間管理術のことであり、このテクニックを使うと一日中高い集中力をキープできるとされ、近年注目されている（シリロ、2019）。実際に筆者も日々のタスク（翻訳作業や大学の試験採点など）に活用してその効果を実感しており、大学の授業における学生の集中力低下をここ数年で痛感していることもあって 2019 年度から授業内で紹介し実践してきた。

25 分 + 5 分が 1 つの単位（ポモドーロ）であり、このポモドーロを 4 回行った後に 30 分の大きい休憩を取ることが推奨されているが、実際の授業では時間の関係上 1 つのポモドーロを実践し、学生たちが自主学習で活用しやすいように体感してもらうことを主な目的とした。

基本的には、Reading（300 words 程度の本文）を CD と共に黙読したあと、Vocabulary Exercise（重要単語とその意味をマッチングさせる練習問題）、Reading Comprehension（内容問題）、さらに筆者が Reading パートからピックアップした 2 文を日本語に「翻訳」させる作業と DVD パートのインタビューの一部を和文英訳させる作業を、25 分間集中して取り組むことを指示する。その際、必ずしも時間通りにタスクが完了している必要はなく、集中することが大切であると繰り返し伝えてきた。

2019 年度からこのポモドーロ・テクニックを導入して以降、授業内で学生の様子を見てみると明らかに集中している人数が多く、課題もしっかりこなしている印象がある。通常の授業スタイルでは残念ながら居眠りをしたりスマートフォンを触ったりする学生が少なからず見られるが、時間管理術を明確に紹介し、自主学習でも使えることを強調してモチベーション向上を図ること、さらに長すぎず短すぎない 25 分という時間制限を課すことで集中力が増すようだ。

また Reading パートの最も特徴的な面は本文の翻訳タスクである。ただ本文を読む

時間を与えて Reading Comprehension で内容に関する問題を解いたところで、実際の理解度を確認することは難しい。そこで筆者の翻訳者としての経験を活かし、本文から抽出した2文を「翻訳者になったつもりで丁寧に」訳すタスクを課した。この際、英文和訳と翻訳の違いをシンプルに繰り返し伝えることが大切であり、授業内では以下の「翻訳のコツ (Translation Tips)」を毎回提示するようにしている。

- (1) 翻訳者になったつもりで丁寧に訳す (読み手にとって自然な日本語になっているか)
- (2) なるべく英語の語順どおり訳す (ただし日本語の自然さを優先する)
- (3) 訳抜けに注意する (訳し忘れた単語がないかチェック)

しかしながら上記のことを毎回伝えていても、いわゆる「英文和訳」の癖が抜けづらく、日本語として不自然な直訳調の訳文を書く学生は多い。授業では毎回ランダムに2名を抽出し、ホワイトボードに書いてもらった訳文を筆者が添削した。この公開添削によって他の学生も「英文和訳」と「翻訳」の違いに気づき、回を重ねるごとに翻訳に慣れてきたという学生からの声も多い。

以上が、筆者が実施してきた対面授業における Reading パートの流れである。

2.3.2 Listening パートについて

Reading パートを実施した次の週には Listening パートで DVD 映像から情報を聴き取って問題に答え、ディクテーション (書き取り) に取り組む。Reading で翻訳作業や問題を考える作業をした次の週に DVD 映像からの情報で英語力を確認するため、学生だけではなく教える側の筆者も気分転換が図りやすい。この教材は楽しく授業に臨めるという利点もあり、英語を媒体にして世界中の文化や歴史に触れることができることも魅力のひとつである。

Listening パートは Reading パート以上に、教える側からの説明は最小限にして、間違いを恐れずリラックスして聴くための声かけを心がけている。基本的には DVD を2回鑑賞し、First Viewing と Second Viewing の問題を自分で考え、その後グループで話し合い、解答を発表してもらう流れである。仕上げとして DVD の穴埋めスクリプトを配布してディクテーションを行う。それにより、間違えた問題に関しても自分で確認して理解できるようになっている。

2021年度から学生は DVD 映像をインターネット上で視聴できるが、2020年度までは学生用テキストに DVD が付いていた。筆者は自宅でも再度聴いて自主学习で活用するよう促していたが、オンライン授業が導入されてから、DVD 機器を持っていない学生が思った以上に多いことが判明した。オンライン授業がなければ気づかなかっ

たことである。しかし現在はより映像にアクセスしやすいことから、自主学習に活用する学生が増えることを期待している。

さらに DVD Part II では非英語圏の人が英語で自分たちの生活について話す映像を見て、問題に解答する。日本人の私たちにとって、彼らの英語は時に外国語特有のアクセントが強いために聞き取りづらく、文法的に間違っていることもある。しかし彼らに共通しているのは、特に間違いや発音を気にせず、伝えようという気持ちを持ってすらすらと話している姿である。こうした非ネイティブによる高度な会話スキルに、学生たちは少なからず刺激を受けるようだ。ネイティブスピーカーの話す英語だけではなく、(私たち日本人を含む) 非ネイティブの英語に慣れる重要性を示し、登場する各国の人々の英語を聞いて間違いを恐れずコミュニケーションしようとする姿勢を学んでほしいと願いながら、この DVD Part II を活用している。

最後に On Your Own というセクションがある。ここでは各チャプターを総括する話し合いのトピックが提供され、日本あるいは自分の状況を振り返って自分がどう思ったかについてクラスメートと話す(または書いてまとめる)などのタスクを課すことができる。たとえば筆者は“Tell your partner about the best journey you have experienced.”というテーマに関して英文ライティングを行い、その後ペアワークで会話させるなどしてきた。

本稿で扱う授業は教養英語科目であり、1週間に1回という時間制限もあってスピーキングの時間を十分確保できないのが悩みである。しかし On Your Own で提供されたトピックを使って短い時間で考えを英語でまとめる発信力を磨き、学期に一度行う課題発表(テーマに沿った自分の考えを PowerPoint に1分程度でまとめて英語で発表する課題)へとつなげていくようにしている。

2.3.3 課題発表について

筆者の授業では、学期の後半に PowerPoint を使用した一人ずつの課題発表を実施してきた。30人以上のクラスでは必然的に個人的なアウトプットの時間が少なくなるため、10回目以降に発表の時間を設けて学生の発信力を磨くことを目的としている。

前期の発表テーマは1分程度の自己紹介であり、サンプル動画を見せてプレゼンで使用する用語集を配布するなどして、学生が負担なく準備できるようにした。学生に示す詳細は以下のとおりである。

① PowerPoint (PPT) スライドを英語で作成 (1人1分: 多少の超過は OK)

スライドには長い文章を入れず、キーワードや項目にとどめます。写真や絵などの画像もぜひ入れましょう。スライドを使った発表は見せる(=魅せる)ことを意識して作成するものです。レイアウトやフォントなどは自由にデザインしてください。

② Word でプレゼン用の英文原稿を作成

自分が話す内容を英語で書きます。書くことによって頭がまとまり、英語を順序立てて書く練習にもなります。暗記する必要はありませんが、流れをつかむためにも原稿は用意してください。(手書き不可)

※PowerPoint ファイルは USB に保存し、Word の原稿はプリントアウトして、課題発表の日時に持参する。

2021 年度の前期授業では、3 回目からオンライン授業に切り替わったものの 12 回目から対面授業が再開したため、11 回目のオンライン授業の際に Moodle 上に課題発表の詳細とサンプル動画をアップロードし、対面授業が再開した 12 回目の授業でも再度説明したのち、13 回目に課題発表を対面で実施することができた。

課題発表ではオーディエンスである学生からも各発表者に対してフィードバックシートを書いてもらっており、講師側からだけでなく学生同士でフィードバックすることで、学生目線で参考になる意見を得ることや、今後の発表時のモチベーションにつなげることを目的としている。

ただしフィードバックには「良かった点」を書くと共に、「悪かった点」だけではなく「発表者が次に活かすことができる愛のあるアドバイス」を意識して書くよう促している。たとえば「声が小さかった」だけでは単なるダメ出しになるが、「声がもう少し大きかったら、より内容が理解しやすかった」など、悪い点の羅列ではなく発表者にとってためになるアドバイスを工夫して書いてもらうことを重要視してきた。

オーディエンスになった途端、どうしても厳しい目で見がちであり悪い点がフォーカスされやすい。そのまま書いてしまうとストレート過ぎて受け取った発表者が落ち込むことも予想されるため、この点は常に強調してフィードバックを書いてもらっている。これにより、クラス全体の雰囲気良くなってグループ活動もさらにスムーズに進むことを実感してきた。

2021 年度はハイブリッド授業になったものの、この課題発表はタイミング良く対面授業で実施できたため、学生の満足度も高くその後の対面授業に対する動機づけにも効果があったと感じている。また学生は 3 回目からずっとオンライン授業で孤独に作業を続け、クラスメートと会っていなかったこともあり、対面授業再開後の課題発表は全員が例年以上に積極的に取り組む高いレベルの発表になった。学生の意識に関する詳細は、後述するアンケート結果の考察で触れる。

2.4 授業の実践方法 (オンライン)

和歌山大学では、2020年度から始まったオンライン授業については、学生の通信環境を配慮して通信負荷が大きくなること、また教員の負担が過多にならないことを考慮して、学習支援システム Moodle を用いた遠隔授業（オンライン授業）が推奨された。そのため、基本的に筆者のオンライン授業でも以下の流れで授業を実施した。

(1) オンライン授業のコンテンツ（Word および PowerPoint 形式）を作成し、Moodle システムにアップロードする。Word と PowerPoint の内容は基本的に同じであるが、PowerPoint には音声での説明や教科書の CD 音源を挿入するなどして、学生が理解しやすく授業を進められるようにした。

(2) 学生は自分のコンピュータで筆者が作成したファイルを参照し、その指示に従って英語の学習を進める。

(3) 期日（約1週間後）までに学生は課題を Moodle に提出し、締切後に筆者が解答および次の課題をアップロードする。

2021年度の前期授業では、先述の通り3回目からオンライン授業に切り替わり、11回目まで Moodle を使用した授業形態となった。教科書は Chapter 1 の途中から Chapter 4 までオンラインで進行した。シラバスでは前期の後半に PowerPoint を使用した課題発表を一人ずつ行う予定であったため、13回目に課題発表を対面で実施することができたのは幸運であった。

2.4.1 Reading パートについて

オンラインでも Reading パートの進め方は対面と基本的には同じである。Word ファイルと音声付きの PowerPoint で課題を与え、次週に筆者が添削や解説を行った。翻訳の添削では毎回違う学生の訳を取り上げ、以下に挙げた一例のように学生訳→講師のサンプル訳→解説コメントの流れで提示した。

<オンライン授業での添削例>

Chapter 1: Page 2

① 【2行目】

A marsupial is a mammal, and the most distinguish feature is that the females have a pouch for feeding and raising their babies.

【学生氏名】

有袋動物は哺乳類に分類され、最大の特徴はメスが自分の子どもを養い、育てていくための袋を持っている点です。

↓

有袋類とは哺乳類の一種で、最も顕著な特徴は、雌が授乳をして子どもを育てるための袋を持っていることです。

【コメント】

全体的に意味はよく取れています。most distinguished は「最大の」だけではなく「最も顕著な」ともう少し具体的に訳すとよいでしょう。後半、「メスが自分の子どもを養う」は、やや人間の生活ように聞こえるので、ここは feeding を「(えさをやる) 授乳する」くらいに訳すと自然です。

通常の対面授業では、指名された学生がホワイトボードに書いた訳を見て、筆者がその場で公開添削して解説している。ブルーのマーカーで元の訳を削除したり修正したりするため、視覚的にも対面授業の添削の方が理解しやすいと思われる。しかしオンライン授業での添削内容は上記のように Word ファイルに残るため、対面授業では聞き流してしまいがちな解説も、後から戻って自分の訳と見比べることができる点がメリットとして挙げられる。

さらに前述したポモドーロ・テクニックを使って Reading 課題に取り組めるよう、丁寧に Word および PowerPoint でも説明している。どうしても自宅での孤独な作業に陥りやすいオンライン授業ゆえに、時間管理がさらに難しくなる。対面授業で使用してきた時間管理術であるが、このポモドーロ・テクニックはオンライン授業でも学生の自主学習に大いに役立ったと筆者は考えている。

全体的にオンライン授業では学生の課題内容も提出状況も例年以上のレベルであり、対面授業よりも学生を自律学習者へと促す最適な環境ではないかという気づきがあった。もちろん対面授業の方が望ましいタスク（スピーキングやグループ活動）も多い。しかし真の自律学習者を育てるためには、毎回教室で教員が指示を出してタスクをやらせる必要があるだろうか、という疑問も浮かんだ。2020年から続くコロナ禍において、慣れ親しんだ対面授業からオンライン授業への急速な変更はあったものの、新たな学びの形態を模索するチャンスが与えられたと筆者は捉えている。

2.4.2 Listening パートについて

対面の Listening パートとの大きな違いは、まず学生は DVD 映像を何度も見て問題に解答できることである。通常の対面授業の場合、全体で 2 回見たあとで問題に解答

する。ディクテーションも最大2回である。リスニングが苦手な学生にとっては回数が少ないと感じるらしく、今回オンラインと対面の両授業でリスニングを実施したところ、学生から「オンラインでは何度も聴くことができたので、対面では急に難しく感じた」という意見があった。また最後の On Your Own セクションでのペアの話し合いはオンラインではできなかったため、学生にライティングしてもらった内容を一部紹介してコメントするなどした。

2.4.3 課題発表について

年間を通してオンライン授業を実施した2020年度の例を挙げると、Moodle上に音声録音したPowerPoint(1分程度)とWord形式の原稿を各学生に提出してもらい、全員がそれを聴いてフィードバックを書くことを課題とした。オンライン授業が続いてクラスメートと交流がなかったため、この課題で他の学生の発表を聞くことは刺激になったようだ。

対面授業での発表では「原稿に頼りすぎず目線や笑顔を意識すること」、「大きな声」、そして「ゆっくりと伝える(原稿があるといふ早口になるため)」などの注意点をまとめて、Smile, Speak up, and Slowlyを提示して「3つのS」を意識するよう伝えている。しかしオンラインはこうした発表での大事な点を確認できない形式であったため、課題発表だけは対面授業の方が望ましいと感じた。2021年度はオンラインと対面の両方を経験できた上に、課題発表は対面授業で実施したことにより、学生と教える側である筆者の両者にとって有意義な授業の進め方ができたように思う。

3. 英語ハイブリッド授業に関する調査

3.1 アンケート調査の方法

2021年度前期の1年生英語必修2クラスを対象に、オンライン授業および翻訳作業について無記名のアンケート調査を行った。調査結果から、学生のオンラインおよび対面授業への意識を把握して今後の授業改善に活かすためである。15回目の最後の対面授業後にアンケート用紙を配布して実施したところ、2クラス計51名からの回答が得られた。自由記述欄には「※オンライン授業について、翻訳を取り入れた授業について、全体的な授業についてなど、ひとことでもかまいませんので必ず記入してください」という但し書きをつけたところ、全員が意見を書いてくれた。これは、過去のアンケート調査で自由記述欄が空欄になっていることが多く、より詳細な意見を得るために追加した文言である。

3.2 学生の意識調査の結果と考察

表1はアンケート結果を人数(パーセンテージ)で表したものであり、表2は平均

値をグラフ化したものである。自由記述の抜粋は表3に示した。

表1を見ると、オンライン授業の自主学習時間の増加（Q1）について肯定的な回答（強く思う/思う）が42%、否定的な回答（思わない/全く思わない）が24%という結果であった。「自主学習時間が増えたと思う」学生の割合がほぼ倍になっており、約半数の学生が対面授業時と比べて自主学習の時間が増えたことが明らかになった。それに対して、学習効果の向上について（Q2）の肯定的な回答は24%、否定的な回答は22%とほぼ拮抗して低くなっており、学習時間は増えたと感じる学生が多かった一方で、効果を感じる学生数は少ない結果となった。後述する自由記述アンケートの結果からも、対面授業の方がペアやグループでの話し合いなどのインタラクションが多く、内容が理解しやすかったと感じる学生が一定数いたためと思われる。

表1. アンケートの結果（N=51）

	Q1. 対面授業と比べ、授業時間外での学習時間が増えた。	Q2. 対面授業と比べ、教育内容や学習効果が向上した。	Q3. オンライン授業の満足度を5段階で評価してください。	Q4. 今後も一部をオンライン授業で受講したい。	Q5. 今後はすべて対面授業で受講したい。
5（強く思う）	12 (24%)	1 (2%)	8 (16%)	10 (20%)	7 (14%)
4（思う）	9 (18%)	11 (22%)	28 (55%)	19 (37%)	9 (18%)
3（どちらとも）	18 (35%)	28 (55%)	10 (20%)	13 (25%)	20 (39%)
2（思わない）	9 (18%)	9 (18%)	4 (8%)	7 (14%)	13 (25%)
1（全く思わない）	3 (6%)	2 (4%)	1 (2%)	2 (4%)	2 (4%)

人数（%：小数点は四捨五入）

表 2. アンケート結果の平均値グラフ

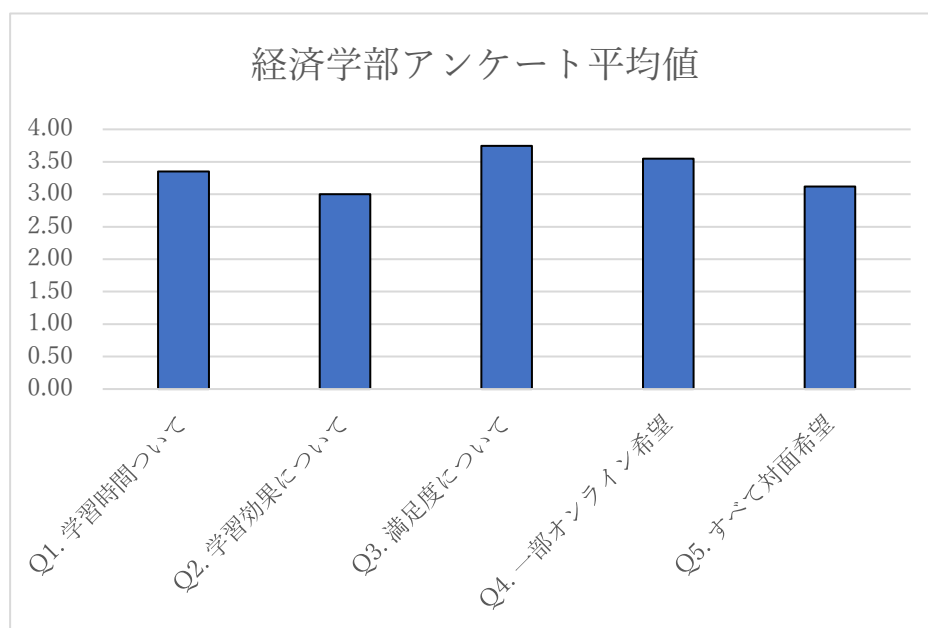


表 2 が示すオンライン授業の満足度 (Q3) では、5 段階の平均値が 3.75 であり中間値 (2.5) を上回っていた。また今後も一部オンライン授業を希望するかどうかに関する質問 (Q4) の平均値は 3.55 であり、すべて対面授業を希望する質問 (Q5) に対する平均値 (3.12) を上回っていた。表 1 のパーセンテージを見ても、一部をオンラインで受講したい学生は 57% と半数を上回っており、すべて対面授業を希望する学生は 32% であったことから、対面授業とオンライン授業の両方の良さを体感した学生の多くが、今後も一部オンラインを希望していることが読み取れた。

表 3. 自由記述からの抜粋

■授業について感じたこと、良かった点や改善してほしい点などを自由に記述してください。(※オンライン授業について、翻訳を取り入れた授業について、全体的な授業についてなど、ひとことでもかまいませんので必ず記入してください。)

●対面クラスに対する肯定的意見

1. 対面の方がオンラインよりもかなりやりやすいと感じました！
2. オンライン授業よりかは対面授業のほうが英語が身に付くと授業を受けていて感じました。グループとの協力が多く、楽しく英語を学びました。
3. オンラインより対面の方が、教室の雰囲気などで集中できたと思う。対面では自分のわからなかったところなどをグループで話し合うことができたので、英語の能力が上がったと思う。
4. 対面授業は集中しやすかったし、英語への意欲が高まる授業だった。
5. オンラインへの対応がはやく、学びを続けられたのでよかった。グループでの作業が多く、モチベーションを保ちながら学ぶことができた。発表の機会もあり、人前で話すという経験ができてよかった。
6. 対面授業の方が授業内容が頭に入りやすく、何より他の子と話せるのが楽しかった。

●オンラインクラスに対する肯定的意見

1. オンラインの方が時間にとらわれずに、自分のペースで受講し翻訳することができたのでとてもよかった。
2. オンラインが自分のペースでできるのでやりやすかった。
3. オンラインになってもしっかりとタスクが用意されていて助かった。タスクも、不可能な量だったり雑に出されたりしたものでなく、「愛」のある授業だったので生徒側としてもやる気になった。
4. 大学に入ってすぐにオンライン授業に切り替わったので不安が大きかったのですが、授業の方式も課題の内容も分かりやすく説明してくれていたのがよかったです。

●オンラインと対面クラス両方に対する肯定的意見

1. 対面授業では前で解説しているのを見ることで、翻訳などの力がつきましたが、オンラインでは何度もリスニングができたり、自分のペースですすめることができたので、どちらもメリットがありました。
2. オンラインでも対面でもやるべきことが分かりやすかったので良かったです。楽しく授業を受けることができたので、今後も同じクラスで受けたいなと思いました。
3. 他の授業に比べると対面でもオンラインでも勉強の方法が分かりやすくて楽しくできたと思います。難易度も高すぎなかったのが良かったです。
4. オンライン授業であっても、本文の日本語訳をするときに、他の人の解答をピックアップして添削してくれていた所が良かった。対面では班で相談 OK な点もとても良かった。

●オンラインクラスに対する否定的意見

1. 周りの学生と意見を共有することがこの授業の魅力だったが、オンデマンドではそれがなくなったので残念に思った。
2. オンライン授業の方が時間が倍近くかかっていました（対面なら 90 分の所をオンラインだと 1 講義 3 時間ほど）。周りの人と相談できないのが辛かったです。
3. オンライン授業はリスニングなどは繰り返し聞くことができ良かったが、翻訳などの書く作業の時はあまりやる気が出ずに、効率が下がったように思えた。

表 3 が示す自由記述では全体的に対面授業を肯定する意見が多かった。これには、緊急事態宣言下でのオンライン授業を経て再びクラスメートと会えたことや、実際にキャンパスで授業が再開されたことへの喜びや新鮮さも含まれるだろう。しかしほぼ同数で、オンライン授業と対面授業の両方を肯定する意見も見られた。2021 年度は同じ授業で両方を経験できたこともあり、両方のメリットをわかりやすく体感できたことによると推測する。実際に筆者にとっても、両方の授業形態は気分転換が図りやすく、今回のようなハイブリッド授業の方が、動機づけや自律的学習者の育成に効果があると感じた。

また対面授業を否定する意見はなかったものの、オンラインクラスを否定する意見は若干数あった。しかし否定する意見にある「2. オンライン授業の方が時間が倍近くかかっていた」は、一読すると否定的であるものの、自分の力で取り組んだ結果

の時間でもあり、学生の学びにとって必ずしもマイナスではないだろう。

さらに「周りの人と相談できないのが辛かった」とあり、これは対面授業を肯定する意見などでも違う表現（「3. グループで話し合うことができたので、英語の能力が上がったと思う」、「5. グループでの作業が多く、モチベーションを保ちながら学ぶことができた。」、「6. 何より他の子と話せるのが楽しかった。」など）で記述されており、協働学習が学生の動機づけに貢献したと考えられる。主にオンラインへの否定的な意見はグループ活動ができないことに起因しており、今後、全面的に対面授業に戻ったとしても、協働学習を用いたペアおよびグループ活動は多くの授業で導入を勧めたい。

旧来型の教師主導の一斉型の講義は、中学高校だけでなく大学でもいまだに行われている。もちろん授業内容によっては一斉型の指導法が合っている場合もあるだろう。しかし江利川（2012:19）は「自立的な学びにとって最も障害となるのが強制的な勉強と競争」であると指摘し、教師が知識を一方的に与えるような講義型の授業はもはや通用しないと断言する。仲間と安心して失敗でき挑戦できる学びの空間を与えること、すなわち「協同的な関係の下での集団的な学び」（江利川（2012:21）の方が教育的効果は高く、「自己効力感」（鳥飼（2018:47））と呼ばれる自分を信じる力を促進することは、筆者も授業を通じて実感している。

2021年度のハイブリッド授業では、協働学習のメリット、すなわち対面授業をする意義をあらためて感じさせられた。逆に旧来型の講義形式であれば、オンライン授業で十分ではないだろうか。未だ収束の見えないコロナ禍の現在において、再びオンライン授業への切り替えが起こる可能性は十分にある。この点において、対面授業は学生と教師が同じ教室に集まり時間を共有する貴重な機会となった。対面の教室空間を最大限に活かすための授業改善への取り組みが、今後の大学教育においてますます必要になるだろう。

3.3 単位認定試験結果の比較と考察

3.3.1 試験の概要

2021年度のハイブリッド授業を終えて、単位認定試験を対面で実施することができた。この結果をコロナ禍以前の2019年度の試験結果と比較して考察する。

両クラス共に同じ教科書を使用し、試験内容は微妙に変わっているものの基本的には同じレベルの内容である。以下に試験概要を説明する。

[1] 英単語を日本語と一致させる（記号形式）	21点
[2] 英単語の定義（英語）を見て英語を書く	12点
[3] リスニングの穴埋め	32点

[4] 英文の翻訳	15 点
[5] 和文の英訳	5 点
[6] 初見テキストの読解問題（記号形式）	5 点
[7] テーマに沿った自由英作（80-100 words）	10 点
合計 100 点	

[6] の初見テキストの読解問題は教科書と同レベルの文章（約 300 words）を読んで 5 つの問題に記号で解答する。それ以外は、すべて教科書や授業で扱った内容から出題した。

3.3.2 2019 年度前期および 2021 年度前期の試験結果

試験時間は 1 時間、両年度共に 16 回目の授業において対面で実施した。試験範囲および内容のレベルは同様で、クラスレベルはいずれも英検準 2～2 級取得済みが大半を占める中上位レベルである。各年度 2 クラスそれぞれの試験結果の平均値を表 4 に示す。

表 4 試験結果の平均値

2019 年度（対面授業）および 2021 年度（ハイブリッド授業）

	2019 年度 クラス A (28 名)	2019 年度 クラス B (28 名)	2021 年度 クラス C (28 名)	2021 年度 クラス D (30 名)
試験の平均値 (100 点満点)	67.0	68.8	70.7	73.2

表 4 のとおり、2021 年度の平均値は両クラス共に 2019 年度の各クラスの平均値を上回っていた。年度別の平均値を比べると、2021 年度全体の平均値は 72.0 点、2019 年度は 67.9 点であり、ハイブリッド授業を実践した 2021 年度の結果が、通常の対面授業を実施した 2019 年度よりも 4.1 点高い結果となった。

アンケートを用いた学生の意識調査では対面授業に肯定的な意見が多く見られた一方で、試験結果は、すべて対面授業を実施した 2019 年度よりもハイブリッド授業を実施した 2021 年度の結果の方が高かったことは興味深い。すべてオンライン授業になった 2020 年度は、残念ながら同レベルの単位認定試験を対面で行うことが叶わず、課題の提出状況と内容を総合的に評価して成績を出すことになった。よって、す

べて対面、すべてオンライン、およびハイブリッドの3種類の授業後の試験結果の比較ができないことは残念であるが、上記の結果からは少なくともオンラインと対面の両方を実施したハイブリッド授業後の方が、対面のみ授業後よりも学習の理解度がより高かったと考えてよいだろう。

4. まとめと今後の課題

本稿では、2021年度前期のハイブリッド授業後のアンケート調査によって学生の対面授業およびハイブリッド授業に対する意識を明らかにし、さらに単位認定試験の結果を2019年度の対面授業後の結果と比較し、考察した。

アンケート調査では、オンライン授業の方が「自主学習時間が増えた」と答えた学生が対面授業を上回っていたが、「教育内容や学習効果の向上」を感じる学生数はどちらもほぼ同じ20%台と少なかった。またオンライン授業の満足度は中間値より高く、今後も一部オンラインを希望する学生数は全体の半数を超えていた。

自由記述では対面授業のメリット（クラスメートとの交流やグループでの話し合い）に触れた内容が多かったが、ハイブリッド型を肯定する意見も同等数あった。オンラインと対面授業の両メリットを経験した学生だからこそ、今後もハイブリッド授業を希望する学生が多かったことが読み取れる。

最後に、2019年度の従来の対面授業後に行った同レベルの試験結果との平均値比較では、2021年度のハイブリッド型授業後の方が高かった。これはオンライン授業の一部導入によって自主学習時間が増えたことや、緊急事態宣言明けの久々の対面授業で普段以上にモチベーションが上がったことが理由として考えられる。筆者も、対面授業再開時は教室で学生の顔を見て教えることの貴重さを認識した。

コロナ収束後に以前のままの授業形態に戻すと、2020年度からのせっきくのオンライン授業の経験が無駄になるのではないかと筆者は懸念している。オンラインと対面を上手く組み合わせて「従来から批判されてきた画一的教育から脱却する絶好のチャンス」（金・森川・岩本 (2021:101)）と捉え、今後の大学英語授業の在り方を議論していく必要があるだろう。

自由記述でも、学生の多くがペアやグループワークでの話し合いを対面授業のメリットとして挙げていた。今後は大学の対面授業においても、これまで以上に協働学習を取り入れる価値がある。「少数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う」（江利川 (2012:6)）機会は、対面授業でのインタラクションなしでは不可能であり、これこそが対面授業を行う意義である。

さらに学生が自ら学ぶ力を養う、すなわち自立学習者になるための効果的なオンライン授業の在り方が求められる。大谷 (2021) が実施したオンライン授業の調査結果では、教員が予習のための指示や資料を与えすぎて管理する授業より、自主性に任せ

た授業の方が総合的に高い評価になったという。日本の学生は中学高校までの受け身型の授業に慣れ過ぎて、学びにおいて常に指示を待つ傾向がある。しかし本稿のアンケート結果でも明らかになったように、約半数の学生がオンライン授業で「自主学习時間が増加した」と感じており、試験結果の比較を見てもハイブリッド授業の方が対面授業よりも学生の理解度が高い結果となった。したがって、オンライン授業では本稿で取り上げた授業例のように、最初に学びの目的と手順を丁寧に伝えて確認し、あとは学生の自主性を促す授業設計が求められるだろう。

今後の課題としては、可能であればオンラインのみを実施した授業後の試験結果との比較や、学部や大学の枠を超えた長期的な調査を実施したい。またオンラインと対面の両方を活かしたハイブリッド授業の定着へ向けて、他大学での授業実践からも学ぶ必要がある。

コロナ禍の困難な状況を新たな教育の好機と捉え、個々の教員のみならず大学と連携した組織的な取り組みが優先課題であると考えている。

参考文献

- シリロ, F. (2019). 齊藤裕一 (訳)『どんな仕事も「25分+5分」で結果が出る ポモドーロ・テクニック入門』. 東京: CCC メディアハウス. [Cirillo, F. (2018). *The Pomodoro Technique*. New York: Currency.]
- 江利川春雄 (編) (2012). 『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』. 東京: 大修館書店.
- ジョンソン, D.W.・ジョンソン, R.T.・ホルベック, E.J. (2010). 石田裕久・梅原巳代子 (訳)『学習の輪: 学び合いの協同教育入門』 大阪: 二瓶社. [Jhonson, D., Jhonson, R., & Holubec, E. (2002). *Circles of Learning: Cooperation in the Classroom*. Minnesota: Interaction Book.]
- 金衿佳・森川慧子・若本夏美 (2021). 「遠隔授業と対面授業、その課題と可能性 コロナ禍から新しい学びへ」. 『Asphodel』 56, 77-107.
- 松田佳奈 (2020). 「大学英語授業におけるアクティブ・ラーニングの試み—World Adventures シリーズテキストを使用した実践報告—」. 辻伸幸・上野舞斗・青田庄真・川口勇作・磯部ゆかり (編)『英語教育の歴史に学び・現在を問い・未来を拓く—江利川春雄教授退職記念論集—』. 広島: 溪水社, 343-353.
- 大谷杏 (2021). 「新型コロナウイルスの影響による大学の英語オンライン授業—実践, その評価と課題—」. 『関西英語教育学会紀要』 44号, 21-39.
- 鳥飼久美子 (2018). 『子どもの英語にどう向き合うか』. 東京: NHK 出版.